

0.1 H25 数学 A

□ (1)

$$u(x) = \int_0^x \phi(x)\psi(y)f(y)dy + \int_x^\pi \psi(x)\phi(y)f(y)dy = \phi(x) \int_0^x \psi(y)f(y)dy + \psi(x) \int_x^\pi \phi(y)f(y)dy$$

である. $\phi(y)f(y), \psi(y)f(y)$ は $(0, \pi)$ 上連続であるから, $u(x)$ は $(0, \pi)$ 上で微分可能である.

$$\begin{aligned} u'(x) &= \phi'(x) \int_0^x \psi(y)f(y)dy + \phi(x)\psi(x)f(x) + \psi'(x) \int_x^\pi \phi(y)f(y)dy - \psi(x)\phi(x)f(x) \\ &= \phi'(x) \int_0^x \psi(y)f(y)dy + \psi'(x) \int_x^\pi \phi(y)f(y)dy \end{aligned}$$

先ほどと同様の理由で $u'(x)$ は $(0, \pi)$ 上で微分可能である.

$$\begin{aligned} u''(x) &= \phi''(x) \int_0^x \psi(y)f(y)dy + \phi'(x)\psi(x)f(x) + \psi''(x) \int_x^\pi \phi(y)f(y)dy - \psi'(x)\phi(x)f(x) \\ &= -\phi(x) \int_0^x \psi(y)f(y)dy + \phi'(x)\psi(x)f(x) - \psi(x) \int_x^\pi \phi(y)f(y)dy + \psi'(x)\phi(x)f(x) \\ &= -u(x) + \phi'(x)\psi(x)f(x) - \psi'(x)\phi(x)f(x) \end{aligned}$$

よって u は C^2 級である.

(2) $u''(x) + u(x) = (\phi'(x)\psi(x) - \psi'(x)\phi(x))f(x)$ である. $h(x) = \phi'(x)\psi(x) - \psi'(x)\phi(x)$ とおくと $h'(x) = \phi''(x)\psi(x) + \phi'(x)\psi'(x) - \psi''(x)\phi(x) - \psi'(x)\phi'(x) = -\phi(x)\psi(x) + \psi(x)\phi(x) = 0$. より $h(x) = W$.

(3) ψ が C^2 級の実数値関数であることと $\psi''(x) + \psi(x) = 0$ より $\psi(x) = \operatorname{Re}(Ae^{ix} + Be^{-ix}) = C \cos x + D \sin x$. (A, B は, $C = A + B \in \mathbb{R}, D = (A - B)i \in \mathbb{R}$ を満たす任意定数) である.

$\phi(x) = \sin x, W = 1$ より $\cos x \psi(x) - \sin x \psi'(x) = 1$. とくに $x = 0$ で $\psi(0) = 1$ である. よって $C = 1$. また $\psi'(0) = 0$ より $D = 0$. よって $\psi(x) = \cos x$.

□ (1) $v \in f^{n+1}(V) = f^n(f(V))$ に対して, ある $u \in f(V)$ が存在して, $v = f^n(u)$ である. すなわち $f^{n+1}(V) \subset f^n(V)$ である.

(2) $f^{n+1}(V) \subset f^n(V)$ より $f^k(V)$ の次元は単調減少である. V は有限次元であるから, ある $n_0 \in \mathbb{N}$ が存在して, $n \geq n_0$ ならば $f^{n+1}(V) = f^n(V)$ である.

(3) $f|_W: W \rightarrow W$ は $f|_W(W) = f|_W(f^{n_0}(V)) = f^{n_0+1}(V) = W$ より全射である. 有限次元ベクトル空間の全射自己準同型は同型射であるから, $f|_W$ は同型.

□ (1) $\pi^{-1}(\emptyset) = \emptyset$ は R の開集合であるから, $\emptyset \in \mathcal{O}$ である. $\pi^{-1}(R/\sim) = R$ は R の開集合であるから, $R/\sim \in \mathcal{O}$ である.

$U, V \in \mathcal{O}$ に対して, $\pi^{-1}(U), \pi^{-1}(V)$ は R の開集合であるから, $\pi^{-1}(U) \cap \pi^{-1}(V) = \pi^{-1}(U \cap V)$ は R の開集合である. よって $U \cap V \in \mathcal{O}$ である.

$U_\lambda \in \mathcal{O}$ に対して, $\pi^{-1}(U_\lambda)$ は R の開集合であるから, $\pi^{-1}(\bigcup_\lambda U_\lambda) = \bigcup_\lambda \pi^{-1}(U_\lambda)$ は R の開集合である. よって $\bigcup_\lambda U_\lambda \in \mathcal{O}$ である.

以上より R/\sim は \mathcal{O} を位相とする位相空間.

(2) ハウスドルフ空間であれば, 一点集合は閉集合である. $\{x_0\} \subset R/\sim$ について $\pi^{-1}(\{x_0\}) = D$ は R の閉集合ではない. よって $\{x_0\}$ は閉集合ではないから, ハウスドルフ空間でない.

(3) $\{x_0\}$ 以外の一点集合はすべて閉集合である. よって f が同相写像なら閉集合の像は閉集合であるから $f(x_0) = x_0$ である.

□ (1) $\{z_n\}_{n=1}^{\infty}$ を z に収束する任意の複素数列とする.

$$\begin{aligned}\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{f(z_n) - f(z)}{z_n - z} &= \frac{1}{2\pi} \lim_{n \rightarrow \infty} \int_0^{2\pi} \frac{\phi(\theta)e^{i\theta}}{z_n - z} \left(\frac{1}{e^{i\theta} - z_n} - \frac{1}{e^{i\theta} - z} \right) d\theta \\ &= \frac{1}{2\pi} \lim_{n \rightarrow \infty} \int_0^{2\pi} \frac{\phi(\theta)e^{i\theta}}{(e^{i\theta} - z_n)(e^{i\theta} - z)} d\theta\end{aligned}$$

ここで $|z| < 1$ より任意の $\theta \in [0, 2\pi]$ とある整数 N より大きい n に対して, ある $\varepsilon > 0$ が存在して $|(e^{i\theta} - z_n)(e^{i\theta} - z)| \geq |1 - |z_n||1 - |z|| > \varepsilon$ である. したがって $\sup_{n > N} \left| \frac{\phi(\theta)e^{i\theta}}{(e^{i\theta} - z_n)(e^{i\theta} - z)} \right| < \left| \frac{\phi(\theta)e^{i\theta}}{\varepsilon} \right| < M \in \mathbb{R}$ である.

よってルベークの収束定理から

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{f(z_n) - f(z)}{z_n - z} = \frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{\phi(\theta)e^{i\theta}}{(e^{i\theta} - z_n)(e^{i\theta} - z)} d\theta = \frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} \phi(\theta)e^{i\theta} ((e^{i\theta} - z)^{-1})' d\theta$$

となり微分可能. よって f は $|z| < 1$ で正則である.

(2) $|z| < 1$ のとき $n!c_n = f^{(n)}(0)$ である. $f^{(n)}(z) = \frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} (\phi(\theta)e^{i\theta})((e^{i\theta} - z)^{-1})^{(n)} d\theta = \frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} (\phi(\theta)e^{i\theta})(n!(e^{i\theta} - z)^{-n-1}) d\theta$ である. よって $f^{(n)}(0) = n! \frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} \phi(\theta)e^{-ni\theta} d\theta$ である.

$$\begin{aligned}2\pi c_n &= \int_0^{2\pi} \phi(\theta)e^{-ni\theta} d\theta = \left[\phi(\theta) \frac{e^{-ni\theta}}{-ni} \right]_0^{2\pi} - \int_0^{2\pi} \phi'(\theta) \frac{e^{-ni\theta}}{-ni} d\theta \\ &= \int_0^{2\pi} \phi'(\theta) \frac{e^{-ni\theta}}{ni} d\theta = \left[\phi'(\theta) \frac{e^{-ni\theta}}{n^2 i^2} \right]_0^{2\pi} - \int_0^{2\pi} \phi''(\theta) \frac{e^{-ni\theta}}{-n^2 i^2} d\theta \\ &= \int_0^{2\pi} \phi''(\theta) \frac{e^{-ni\theta}}{n^2} d\theta \leq 2\pi \max_{\theta \in \mathbb{R}} |\phi''(\theta)| \frac{1}{n^2}\end{aligned}$$

よって $n^2|c_n| \leq \max_{\theta \in \mathbb{R}} |\phi''(\theta)|$ である.

(3)

$$\sum_{n=0}^{\infty} |c_n z^n| \leq \sum_{n=0}^{\infty} |c_n| \leq \sum_{n=0}^{\infty} \max_{\theta \in \mathbb{R}} |\phi''(\theta)| \frac{1}{n^2} < \infty$$

よって絶対収束するから, $|z| = 1$ で $\sum_{n=0}^{\infty} c_n z^n$ は収束する.

(4) ワイエルシュトラスの M 判定法と (3) での不等式から $\sum_{n=0}^{\infty} c_n z^n$ は $|z| \leq 1$ で一様収束する. したがって一様収束先の関数は連続であるから, $\lim_{x \rightarrow 1-0} f(x) = \lim_{x \rightarrow 1-0} \sum_{n=0}^{\infty} c_n x^n = \sum_{n=0}^{\infty} c_n$ である.